



永久機関のジン（3）



別句通 〈bekkutooru〉

(2から続く)

アイは隣のオカマ氏に声をかける。

「あの一、すいません、ここの決闘のしくみってどうなってるんですか？」

「あらぁ知らないの？永久機関を原動力にした装備(エキップメント)という武器を使って戦うのよー。そして勝ったほうが負けたほうの特許データを獲得して自分の特許に追加(プラス)できるワケ」

「特許？あの人たちが？」

「ああ見えてもあの人たち、普段は日夜研究に没頭してんのよ。だから彼らにとって特許は命みたいなもんよ。要するにそれを賭けて戦うわけー。で、観客の私たちはどっちが勝つかを賭けるワケ。男のロマンでしょ？」

オカマ氏はうっとりして一人悦に入っている。

「そうかー。特許をかけて戦う研究者兼格闘家ってワケか」

リング上では決闘者どうしの会話が続いている。コンゴウが腕組みをしてジンに語りかける。

「くくく。確かに俺は十村教授とともに永久機関の研究をしていた。教授の死後、俺を含めて何人かの研究者は教授の特許をありがたく頂いた」

「だまれ。親父は殺されたんだ！そしてはお前らがタダで特許を奪い去っていった！」

アナウンスが鳴り渡る。「すいませーん。お時間もありませんので、お二人とも陣形にどうぞ〜」

コンゴウはジンに向いたまま飛んで後ずさりをして、乙亥(キノトイ)に飛び乗る。

「真剣勝負の怖さをどれほど知っているね？お前が持っている特許には、さぞ親父の秘蔵の知識が詰っているんだらう」

観客席がざわめく。どの観客もシートの肘掛けにしつらえてある手元のパネルを操作している。

。

「コンゴウに20万、いや30万丸だー」

「俺は40万だー」

そういった声を尻目にオカマ氏がつぶやく。

「あたしは可愛いからジンちゃんに1万丸。でも、どうせ潰されちゃうでしょうね」

「ジン君……」

乙亥(キノトイ)に乗り込んだコンゴウが猪を捕らえた猟銃ハンターのような目でジンを見下ろしている。

その態度を拒絶するようにジンはまくしたてる。

「あいにく、今持っている特許は俺だけの手によるものでねー」

「何?!」

ジンが肩のギターケースをおろして中を開いた。

その中には細かいビーズのような物がぎっしり詰まっていた。

コンゴウが不思議そうにそれを見た。

「?なんなのだ。それは？」

「これが俺の……」

ジンがそう言うと、そのビーズたちがするするとまるで意志があるかのように動き出して、ジンの体を覆い尽くそうと這い登っている。

「装備(エキップメント)『マクスウェル』だ!!」

ビーズがジンの頸から下を全て覆い尽くすとそれらのつなぎ目が徐々に消えていき、やがてまるでレオタードのように身体にびたりとフィットした。

「ふむう。静電気を利用して体に貼り付けているのか」

「行くぜー、ジーオヤ野郎!!」

ジンは大声でウォークライを叫んだ。

そしてコンゴウめがけて飛び上がり、乙亥(キノトイ)のボディに立った。触手がジンの体に巻き付こうと伸びてくる。コンゴウはアルカトラスとの対戦のときのように、着座していたポジションから乙亥(キノトイ)の中に身を潜らせた。ジンが両の拳を構えると、拳骨の部分に小さな稲妻のような放電が起こり、ドリル状に変化して高速回転し始める。「おお〜コレは凄い!ジンの装備は今までにないタイプの装備だー!さすがは5000万特許の挑戦者だぁ〜!!」

場内アナウンスは興奮しまくって実況をしている。

観客も番狂わせのジンの能力に大喚声を上げ場内は騒然とした。

ジンは手のドリルを使って迫りくる乙亥(キノトイ)の触手をぶった斬り、ボディにも次々と穴を開けていく。

「なんだ、手応えねえな!」

乙亥(キノトイ)の内部からコンゴウの声が響いてくる。

「フッフ。かゆいだけだな。蚊でも刺したのかな？」

「なんだぁ?隠れてないで顔を出しやがれ!それとも引きずり出してやろうか？」

「それには及ばない」

乙亥(キノトイ)のボディの一部が盛り上がり何本もの手の形になり、ジンの腕や足を押さえた。
。 回転している放電ドリルもその手で捕まされると消滅させられてしまった。

「おっとー」

ジンは少し冷や汗をかいたがニヤリとした。

コンゴウの声が響き渡る。

「永久機関とは電子を操り、電気を僕(しもぺ)とすることなりー」

乙亥(キノトイ)から生えてきた手を通し、ジンの体に電流が流れ、稲妻のような放電の線が無数に発せられた。「ウッ」

ジンの目が一瞬宙に向けられると、体を覆っていたマクスウェルの元の姿であるビーズの形態に戻り、やがて一つ一つばらばらとリングの床に落ちていった。

ジンは同時に乙亥(キノトイ)のボディから転げ落ちてリングに倒れ込んだ。

乙亥(キノトイ)のボディの一部が再び盛り上がり人の形となった。そしてそれは見る見る間にコ

ンゴウのシルエットに変貌した。コンゴウは乙亥(キノトイ)のボディの分子をすり抜けて乙亥(キノトイ)の内部から出てきたのだった。「ガキが一。まだ貴様に永久機関士を名乗るのは早い！素直に敗北を認めろ。その言葉で地上5万mに周回する特許管理局の人工衛星『ハイビスカス』は反応するー」

コンゴウが人差し指で天を指した。「そうすれば貴様の保有特許データが自動的に俺の貯金箱(ピッグバンク)に複製される！」

アイがはらはらしながら見守っている。

「ああ～ジン、負けちゃうよー」

コンゴウは乙亥(キノトイ)の上に立ちつくし、リングで苦しげに起き上がろうとしているジンを勝ち誇った目で見下ろしている。

「ふふふ。いい眺めだぞ、十村Jr(ジュニア)。たぶん私を追って今日ここに来たのだろうが、あえなく返り討ちに遭ったな」

「バッキャロー。まだ勝負は終わってねーぜい！」

「愚かな。どちらかが負けを認めない限り、倒れるまで戦いは続けねばならないのだぞ」

「負けるのは貴様だぜ！」

「?!」

コンゴウが足下を見る。先ほどジンに貼り付いていたビーズがするすると登ってきた。

「うおっ！」

コンゴウが気づくや、ビーズが一斉にコンゴウの頸から上を覆い尽くす。

「むっ、くうー」

コンゴウが顔からそれを引きはがそうとするが、ビーズは引きはがしても引きはがしてもくっついてくる。

「さっき実はわざとはがして、あんたにくっつけようと思ったんだよ。どうだ苦しいだろう！あんたの負けだ！」

コンゴウは体の動きを止めた。手につけていたブレスレットのレンズの赤い輝きが消えた。

場内は静まりかえった。

「や、やりましたー！飛び入り参加の、若干17歳の機関士ジン、堂々の逆転勝利で一す！」

アナウンスが言い放つと場内は拍手と大歓声とブーイングの嵐が巻き起こった。

「コンゴウ、馬鹿野郎ー！」

「てめえ首くくれー」

マクスウェルのビーズが頭からぼろぼろ落ちていくコンゴウは無言のままうつむいてしゃがみこんでいた。

ジンはそれを見てほくそ笑む。

「アンタも強いけど相手が悪かったな」

「くそ！覚えてろ！」

コンゴウはジンを敵愾心に満ちた眼で睨み付ける。

「さ、賞金もらって帰るっかな、っと」

ジンはリングを後にした。

スピアが飛んできてそのあとについて行く。

表では陽も西に傾き始めていた。

ジンは汗をかきながら大きなあくびをした。

「あーあ、やっぱ、トキヲはアチーな。なあスピア」

「待って〜」

ジンとスピアが後ろを振り返るとアイが後を追いかけて走ってくるのが見えた。

「あー！君、さっき、客席にいたよね？」

アイが一瞬、声の大きさに身が固まった。

しかしすぐ持ち直して、息を切らしジンのそばまで駆け寄ってきた。

「はあはあ。出口と間違っって3階まで行っちゃった。あ、こんにちは。あたし一本松愛衣(アイ)」

「おれ、十村仁。ジンって呼んでよ。へへへ。さっきはどうも」

ジンが鳥足の目になって手でヨダレを拭った。

「それはもういいっての！！それよりこれ読んでよ！」

アイがキレそうな顔になりながら、一本松博士からの手紙をジンに示した。

「これ何？」

「読めばわかるわよ」

ジンが手紙を一通り読み終え、アイに語りかける。

「君はもしかして親父が世話になってたという一本松博士のお孫サンかい」

「そう。うちのおじいちゃん……」

アイは鞆の中からタオルを出してジンに渡す。

「おっ、サンキュー」

ジンはそれで汗を拭いた。アイは顔をしかめて言い放つ。

「どうでもいいけどアンタまた別のこと考えてたでしょう？」

ジンはアイを見てしまりの無い顔になっていた。

「え？何が？」

「アンタ、どうしてタコみたいに口になってんだよッ！」

ジンが首を前に出して唇をとんがらせている。

アイは眉を八の字に曲げて唇を噛みしめる。

「手紙返して！じゃ、これでさよなら！」

アイはジンの手から手紙をひったくると踵を返して、立ち去ろうとする。

「あ、ちょっと待ちなよ。その手紙に君を守れ、って」

ジンがアイを呼び止めるため肩に手を置こうとすると、アイのひじ鉄が飛んできた。

「おあいにくさま。結構です！」

「イデッ！」

ジンは眼から火花が飛び出て路上に倒れてしまう。

スピアが心配そうにジンの周りを巡回した

(4 に続く)

永久機関のジン（3）

<http://p.booklog.jp/book/76299>

著者：別句通〈bekkutooru〉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bekkutooru/profile>

*本作品はフィクションです。実際の人物・団体・事象等とは一切関係がありません。

*本作品の著作権はGK CIRCUIT LIMITEDが保有しております。

*本作品の2次利用は無償とします。ご利用される方はmail@gkccircuit.comか

若しくは<https://twitter.com/bekkutooru>

にツイート等してご一報下さい

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76299>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76299>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ